

2025年7月総評 暮田真名

プリン掬うように上京して桜散る

杉本 太

それまでの住環境から自分の空間のみを東京に移動させることを、スプーンでプリンを掬うさまに喩えた。上五、中七の破調が「桜散る」をスムーズに導いている。

溜息のように磯巾着あるく

上原一樹

文字通り読めばイソギンチャクが溜め息をついているということになるが、実際は、人間のついた溜め息にイソギンチャクが流されるようなかたちだろう。想像するとかわいい。

工場をつくるみたいに頬で笑む

背腹 颯太

「作り笑い」という言葉を「工場をつくる」に発展させた。工場と頬は、壁で囲われているか、剥き出しか、という点に違いがある。製造物がすぐさま外に出ていくのだから、「微笑み工場」は過酷である。

口からお茶を

飲んでるだけで、

目から涙が

出てきます。

ゆるり

顔という器が湛えられる水分量に限りがあって、お茶として摂取した水が涙となって出ていくかのよう。実際のメカニズムとはかけ離れているのだが、機械的な記述が、かえって秘められた悲しみを伝えている。

熱帯夜羊が羊数え合う

野城 知里

毛を刈るため、肉を食うため、果ては眠るために、人間に利用される羊たち。この句のどきどきするようなおぞましさはなんだろう。まるで共食いの現場を見てしまったかのようなのだ。

はんぶん空はんぶん海の油絵を  
溺れたいから見つめつづけた  
早瀬はづき

水彩画ではなく、油絵というのがポイントだ。油絵の具は海水よりもずっと粘度が高い。油絵に溺れることを想像する。きっと生クリームにからめ捕られる小蠅のように、運命への抗えなさを感じるだろう。

恒星に勝ってわたしが産まれたの  
互井宇宙論

「じゃんけんで負けて蛭に生まれたの」(池田澄子)の本歌取り。「産まれた」という漢字の選択によって本家の「輪廻転生」のような気配は薄れ、母親の胎内で恒星に競り勝った、という景のインパクトが際立つ。

覆水が盆におかえりなさい  
綿貫 文

「覆水盆に返らず」は行為の不可逆性、取り返しのつかなさを言うための諺。それをあっさり覆してしまう甘さが良い。「盆」は食器を指すが、時期だとすれば本当に返ってきてしまいそうだ。

火を口に含めば照らされる喉だ  
高遠みかみ

「ファイアーイーティング」という曲芸があるが、空想の景でもおもしろい。当たり前のことが書かれているようで、一瞬、人間のからだがかんテラになったかのような錯覚も生まれる。

短夜は映画の広いトイレです  
奥井 健太

短夜という時間、トイレという空間の取り合わせ。ネットでインテリアの画像を検索して見ていたら映画のセットだったときの空虚さのことが思い起こされた。